

# 特別図書資料解説 ヒュームの『人間本性論』初版

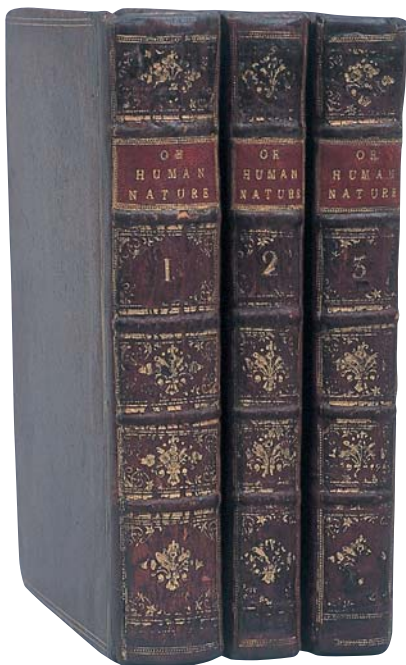


文学部准教授 久米 暁

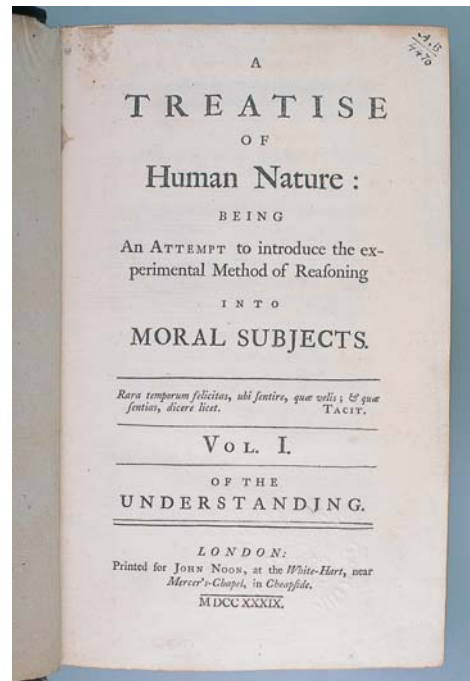
『人間本性論』(A Treatise of Human Nature)は、第1巻と第2巻が1739年に、第3巻が1740年に、ロンドンの出版社から匿名で出版された。当時一般的だった予約購読者の募集もなされず、また慣例の有名人への献辞も付されていない。この書は、前触れもなく、不躰に、この世とのつながりを持たずに忽然と世に姿を現したのである。

この本が、当時まだ二十代の無名の青年、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-1776)の手によるという噂は瞬間に広まり、公然の事実となった。けれども当のヒュームは著者たることを否定し続けた。最終的に遺書『自伝』(On My Life)でそれを認めた時も、『人間本性論』は若気の至りの失敗作であり、世間から完全に無視されて「印刷所から死産した」と回顧している。『人間本性論』はこの世とのつながりを持たぬま

ま葬り去られたというわけである。しかし実情はちがう。この本は無視などされず、むしろ激烈な誹謗中傷に会ったのである。危険思想の本として当時禁書扱いとさえなっていた(後に経済学者として名を上げる若きアダム・スミスが『人間本性論』を読んでいるのを見つけられて処分を受けたことは有名である)。また、この書は、危険思想の持ち主としてヒュームの悪名を高め、大学教員の就職の妨げとなり続けたし、川に落ちても助けてもらえなかったとか、家に連れてきてはいけない人とされていた等、数々のエピソードも残っている。さらに、『人間本性論』の「危険思想」に対する哲学的批判こそが、スコットランド学派の哲学者やドイツのカント等、同じ18世紀の哲学者たちの共通課題となっていたほどである。日常生活において、当時のヨーロッパの学界において、敵視を一身に浴びた書



『人間本性論』(A Treatise of Human Nature) 初版 第1巻～3巻



『人間本性論』初版 第1巻 標題紙

物だったのである。

しかし今では、『人間本性論』は英語で書かれた最も偉大な哲学書という評価をほしいままにしている。出版以来250年絶えることなく哲学的意義が何度となく掘り起こされてきた古典中の古典であり、西洋哲学史の主著の一つであることを誰しも疑わない。

では、危険思想とのレッテルをかつて貼られ、今では哲学的名著の地位を確保している、この『人間本性論』はいったいどんな本なのだろうか。本書は全部で三巻からなるが、第1巻「知性について」では、人間の認識能力を見定める認識論が展開され、第2巻「情念について」では、人間の様々な感情や行為の動機の生成に関するメカニズムが究明され、第3巻「道徳について」では、価値・道徳・社会のルールの根源が明らかにされている。自然科学の方法として当時成功を収めていた経験主義的方法（ヒュームの言葉では「実験的推想法」）を、人間精神の関わる領域に導入することによって、人間精神についての学問を「思いつき」や先入観から解放して構築することが試みられている。『人間本性論』の副題は「実験的推想法を精神の諸問題に導入する試み」である。

より具体的にその内容を紹介するために、まず第2巻から話を始めよう。ふつうわれわれは、情欲に流されがちな自分の行為を理性によって制御するべきだと考えている。この理性主義の考えは、日常的にも、そして哲学の歴史においても古来よりわれわれを縛ってきた標準的な考え方である。特に、ヒュームの生きた近代ヨーロッパの時代においては、理性の力によってすべてを知り、そして理性的な知識に基づいて人間の行動を制御するべきだとする理性主義がまさに謳歌されていた。その只中であってヒュームはこの理性主義に反旗を翻した。知的能力としての理性はそもそも情念と対立関係に立てず、情念の定める目的を達成するための手段を見つけることしかできないと論じ、次のような有名なテキストを残した。「理性 (reason) は情念 (passion) の奴隷であって、しかもそうあるべきであり、理性は決して情念につかえ従う以上の任務を要求できない」。

どうということだろうか。たとえば、食堂で焼魚定食とカルボナーラとで迷ったとしよう。カルボナーラが美味しそうなので食べたいと思うけど、自分は今ダイ

cannot be the same with reason, and is only call'd fo in an improper sense. We speak not strictly and philosophically when we talk of the combat of passion and of reason. Reason is, and ought only to be the slave of the passions, and can never pretend to any other office, than to serve and obey them. As this opinion may appear somewhat extraordinary, it may not be improper to confirm it by some other considerations.

【人間本性論】初版 第2巻 p. 248

「理性 (reason) は情念 (passion) の奴隷であって、しかもそうあるべきであり、理性は決して情念につかえ従う以上の任務を要求できない」の部分。

エット中である。カロリーは焼魚定食のほうがカルボナーラよりも低い。理性は焼魚定食を食べよと言うが、でも情念はカルボナーラを食べよと言う。これが理性と情念との闘争のシーンの一例である。この場合、焼魚定食のほうを食べよというのは理性の教えであるように見えるが、しかし実は、その選択を支えているのは痩せたいという情念である。たしかにカロリーが少ないほうを食べたほうが痩せるという事実を知的能力としての理性は示してくれるけれども、ここで争っているのは、理性と情念ではなく、痩せたいという情念と美味しいものを食べたいという情念とである。理性主義者は次のように抗弁するかもしれない。何も単に痩せたいと思っているわけではなく、ボクシングの計量にパスして試合に出るためにどうしても痩せなければならぬのだという理性的判断に基づいているのだから、やはりこれは理性と情念の闘いなのだ、と。しかしその抗弁も無駄である。理性は、痩せれば軽量にパスして試合に出ることができる、ということを見せてくれるが、痩せよう、だから焼魚定食を食べよう、という選択を支えているのは、ボクシングの試合に出たいという情念である。この場合も結局、美味しそうなカルボナーラを食べたいという情念と闘っているのは、ボクシングの試合に出たいというより根源的な情念である。情念に対抗できるのは別の情念でしかないのだ。理性は、カロリーが少ないほうを食べたほうが痩せるという情報を教えてくれるが、しかしそもそも痩せたいと思っていなければ、その理性に基づく情報自体が行為を促すことはない。理性は、痩せれば軽量にパスして試合に出ることができることを教えてくれ

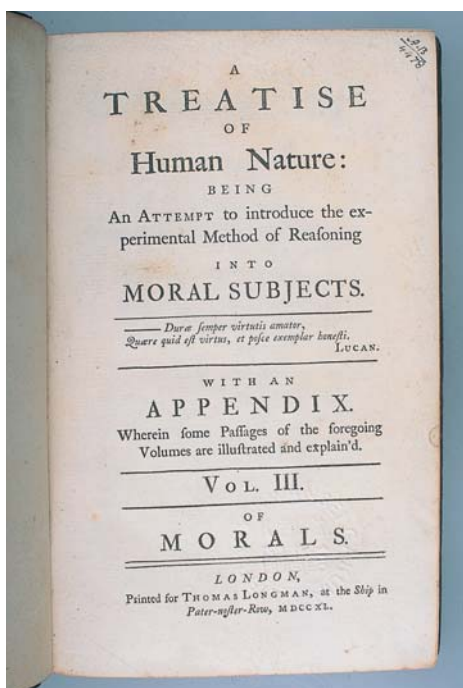
るが、そもそも試合に出たくなければ、その理性の教え自体が瘦せようという行為を促すことはありえない。情念こそが根源的に行為を促すのであって、理性は単独では行為を促すことはできない。理性の役割は、「情念の奴隷」として、情念が求めていることを実現する有効な手段を見つけることでしかないのだ。

第3巻「道徳について」は、行為の動機づけに関するこの反理性主義的議論を足がかりとして、道徳に関する反理性主義的理論を展開する。道徳判断「その行為は善い」「あの人は悪い」はそれ単独でわれわれの行為を促すことができるし、そうでなければ道徳判断に何の意義もない。やや具体的に言い直すならば、「その行為は悪い」という判断は、そう判断している当人の心を（最終的に当人がどう行為するかは別として）その行為をやめるようにある程度動かすのでなければ、この判断に何の意味もないのである。ところで、理性は、先ほど見たように、単独でわれわれの行為を促すことなどできない。とすれば、道徳判断は、理性の主張ではなく、情念でなければならない。「その行為は善い」という道徳判断は、知的能力としての理性に基づく判断ではなく、その行為を見たときにある種の快い情念をいだくということである。ヒューム曰く「あなたがある行為や性格を悪いと言うとき、あなたの意味する

ことは、あなたはその行為や性格を考えると・・・非難の感情や心持をいだくということにほかならない」。

とはいえ、道徳判断「あの人の行為は善い」を下す際、われわれは確かに「あの人が好き」という単なる情念の判断とは別種類の判断をしているように思われる。ヒュームがその差異をないがしろにするはずもない。たとえば「あの人の行為は悪い」と道徳判断を下す場合、それと同じ行為が同じような状況でなされた場合、それを誰がやったとしても同じように悪いという一般性が成り立つ。他の家の子供がやったら悪いことは、どんなに可愛い自分の子供がやったとしても悪いのである。好き嫌いといった単なる情念の判断の場合はこの一般性は必ずしも成り立たない。そこでヒュームは、人を言わば公平に見る「一般的観点」(general point of view) に立ったときに感じられる特殊な感情を道徳感情とした。「道徳的には善くない行為だけれどもやりたい」というような道徳と感情との対立は、伝統的には理性と情念との対立であると理解されてきたが、先に見たように、理性と情念とは原理的に対立関係に立つことは不可能である。道徳と感情との対立は、ヒュームによれば、「一般的観点」に立って感じられる特殊な感情とそうでない感情との対立、すなわち情念同士の対立なのである。

さて、認識論を論じている第1巻に話を移そう。とりわけその独創性によって目を引くのは、帰納法の正当化に関する議論である。帰納法は、科学的探究において当たり前に使われている推論法である。それは、これまでずっとこうだったという過去のデータを証拠として、これからもそうだろうと推論する方法である。さて、帰納法は「自然の斉一性の原理」(The Principle of the Uniformity of Nature) つまり「世界のあり方は、これまでとこれからとが似ている」という原理に基づいている。では、この原理はどのように証明できるだろうか。「世界のあり方がこれまでそうであったらこれからも必ずそうだ」という強い原理が証明できないことは言うまでもないし、この原理が証明できなくても自然科学はビクともしない。自然科学は、ある事象が絶対に必ず起きると予測する必要はなく、ある事象が起きる可能性が高いと予測するだけで、その予測の役割を充分果たせるからだ。ヒュームの独創性は、「世界のあり方がこれまでそうであったなら、これからもそ



【人間本性論】初版 第3巻 標題紙  
「付録」(Appendix)が付されていることが示されている。  
「付録」には、第1巻に関する重要な訂正が含まれる。

うである可能性が、そうでない可能性より少しだけ高い」という弱い原理さえも全く証明できないことを示した点にある（「この原理自体はこれまでずっと成り立ってきた、だから、この原理はこれからも成り立つであろう」として、この原理を証明することは循環論法である。なぜなら、この証明自体がこの原理自体すなわち「世界のあり方がこれまでそうであったなら、これからもそうである可能性が高い」という原理を使っているからである）。この弱い原理が証明できないという事態は自然科学の合理性を揺るがす。なぜなら、もしこの弱い原理が成立しないとなると、過去のデータはいかなる予測にも全く役に立たないことになるからである。ヒュームによれば、自然科学のすべての予測には、それを正当化する理性的根拠が全くなく、人間はただただ習慣によって、未来も過去と同じようなあり方をしているのだらうと単に想像してしまっているだけ、ということになる。

当時から現代に至るまで、こうした『人間本性論』の様々な議論は懐疑論だと解釈されてきた。つまり、人間理性の中核をなすと思われてきた科学や道徳は実は理性に基づくものではない、だからそれらは疑わしい、とヒュームは論じたというのだ。この懐疑論こそ当時危険思想とみなされたものであり、スコットランド学派の哲学者たちやカントらはこのヒュームの懐疑論を克服しようとした。さらに、現代哲学における様々な動向は、こうしたヒュームの懐疑論を批判して科学や道徳に理性的根拠を与えようとすることによって生まれてきたと言っても決して過言ではない。このことだけでも『人間本性論』には不朽の意義があると行ってよいだろう。

しかしヒュームが本当に述べたかったのは懐疑論ではないと思う。ヒュームは確かに科学や道徳が理性に基づかないことを徹底的に示してみせた。けれども、だからといって、それらが疑わしいとは決して言わなかった。ヒュームは、理性に基づかないものは疑わしいという考えを持たなかった、いやむしろ、その考え方を批判しようとしたのである。确实であることを示すためには理性的根拠を示さねばならないとする理性主義特有の強迫観念をヒュームは取り除こうとした。そのために人間の営為の中核をなす科学や道徳が理性に基づきえないことを示して、人間本性の根源は理性

にはなく想像力や情念にあることを明らかにしようとしたのである。しかし、ヒュームの敵、すなわち理性主義は思いのほか強力だったと言えよう。それは、当時から現代まで『人間本性論』の議論が懐疑論だと解釈されてきたことに如実に示されている。科学や道徳が理性に基づきえないというヒュームの議論は、理性主義そのものの解体というヒュームの独創的な意図に反して、理性に基づかざるものは疑わしいとする旧態依然の理性主義の地平で解釈され続けて、科学や道徳が疑わしいとする懐疑論を主張した議論だと誤解され続けているからである。現代まで続く理性主義の強迫観念を解消しようとするヒュームの反理性主義に、『人間本性論』のより深い現代的意義を見出すことができると思う。

世界に数えるほどしか現存しない『人間本性論』の初版が、このたび本学図書館の特別図書のリストに加わった。『人間本性論』は、その確固たる地位が確立された現代においては、様々な校訂や編集・注釈を施されて、様々な出版社から様々な形で出版されている。そのどれを取っても「デイヴィッド・ヒューム」の名が冠されている。けれどもこの初版のどこを見ても著者の名前は記されていない。このことがこの書のその後の孤独な運命を象徴しているように見える。しかし『人間本性論』は、世間からもヒューム自身からも見捨てられ、様々な誹謗中傷・敵視・誤解を浴びせかけられながらも、強く生き続け、二百七十年近くの時を経た現代において、その新たな意義を輝かせている。真の学問たるもの、そう易々と世間から正当な評価を受けるとはなく、その意義は、長い時を経てはじめて発掘され理解されていくことは言うまでもない。「印刷所から死産した」と言われた『人間本性論』初版こそ、紛れもなく真の学問の象徴である。即効性のある学問ばかりがもてはやされる昨今、本学の図書館には『人間本性論』初版が所蔵されているということの象徴的意味を思わざるをえない。

#### 久米 暁 (くめ あきら)

関西学院大学文学部准教授。専門は哲学。主著は『ヒュームの懐疑論』（岩波書店、2005年）。他に『ヒューム読本』（共著、法政大学出版局、2005年）、『岩波講座哲学第9巻－科学／技術の哲学』（共著、岩波書店、2008年）、『何が社会的に構成されるのか』（共訳、岩波書店、2006年）等がある。